

# 和紙



## おりおりの記

# 「雲関」を抜けた先には

岡三証券グループ  
取締役社長

新芝 宏之

「龍」が描かれた色紙が二枚、私の執務室に飾られている。岡三証券グループの故加藤精一会長の直筆による水墨画であり、私の経営者としての大切な指針となっている。

一枚の「龍」には「一回透過雲関了 南北東西活路通」と漢詩が添えられている。困難な関門であっても、ひとたびその関門を抜けてしまえば、あとは自在で爽やかな境地があるという意味だ。この色紙を精一会長から手渡されたのは、日本証券業協会の政策秘書を務めていた1998年。当時は、日本版金融ビッグバンや山一証券の破綻など、証券業界に激震が走った時期であり、精一会長はご自身の心境を漢詩に照らし合わせていたのではないか。手数料の完全自由化など、様々な旧制度が新制度へ移行する困難な環境の中、あえて火中の栗を拾うとも言われながら、証券業界への「恩返し」という強い思いを持ち、日本証券業協会会長として様々な対応に奔走された。同時に岡三証券グループの事業変革にも取り組み、私は間近で精一会長をお支えし、多くのことを学ぶことができた。困難な関門でも突破できること、また、突破しなければ、その先に明るい未来は訪れないことを知った。経営者はやり抜

く決意、覚悟を持つことが肝要だ。

もう一方の「龍」には「龍驤虎視」とある。龍が天に駆け上り、虎がにらみつけるように、威勢の盛んな者が世を睥睨するさまを表す。2014年に私が社長に就任した際、やはり精一会長から頂いた。「龍驤虎視」のように天下に権威を振るうという境地にまで達することは決してないだろう。ただ、二頭の「龍」を仰ぐたび、経営者として、全体をしっかりと見渡し、皆が幸せになる会社にならなければならない。そして、人生の大切な師である会長から受けた「師恩」に報いたいと気を引き締めている。



▲故加藤精一会長と並んで。2000/4/17於台北

岡三証券グループは、2023年4月に創業100周年を迎えた。証券業界が激変する中で、これまでの「伝統」を守り続けるためには、ビジネスモデルの「革新」が不可欠だ。容易に「革新」は進まないものの、次の100年に向けた経営基盤を確立することが、「師恩」に対する「報恩」になると信じている。創業100周年を新たなスタートと捉え、あえて困難な関門に挑む覚悟だ。鋭く厳しい中にも、優しさを秘めた「龍」の眼光に見守られ、いずれは雲関を抜け、グループの役職員の皆と共に自在で清らかな境地に到達したいと思う。